
仮面ライダーWING

カイルド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーWING

【Nコード】

N4926H

【作者名】

カイルド

【あらすじ】

平穏に暮らす九条翼と妹の舞。ある日、翼の通う高校に姫川唯子と言う少女が転入して来た。時を同じく、舞を狙う狂気の影が迫っていた。唯子は言う。「あなたは、選ばれし者……舞を助けたいのならば、変身して」翼は、舞を救うため、唯子から受け取ったベルトを装着する！

Episodo 01 選ばれた二人（前書き）

オリジナルの仮面ライダー小説です。

文章力などが乏しいですが、読みたい人はお願いします。

Episodo 01 選ばれた二人

明朝、とある住宅街の一角。

九条と書かれた住宅。そこには、二人の兄妹が住んでいる。

「舞、今日の制服姿も可愛いな」

兄の翼は、テーブルの向かいに座る妹の舞の制服姿を見て微笑んだ。

「ありがと……お兄ちゃん、でも、毎日同じこと言ってる」

舞はトーストを口に運びながら言った。

「そうだったけ？　ところで……学校はどうだ？　楽しいか？」

「うん、新しい友達も出来たし」

「そうか。でも、女子高だからなあ……いけない恋に、はしったらいかんぞ？」

「そんな趣味ないよ！」

すかさずツツコム舞。

「部活はやるのか？」

「うーん……今のところは、考えてないかな？　でも、新歓会の時ね、軽音楽部の演奏がすごくよかったんだ」

「興味あるなら、軽音部に入ればいいじゃない？」

「私、楽器なんて弾けないよ」

諦めたように話す舞。そんな姿を見て、翼は妹の頭を撫でながら語った。

「でも、興味あるんだろ？ 何もせずに出来ないなんて言って諦めてたら、楽しいって思えることにも出会えなくなるぞ？」

「お兄ちゃん……」

少し重みのある翼の言葉に、顔を上げた。

「そうだよね。やってみようかな、軽音部」

「頑張れよ、舞！ っと、いけね、もう時間だ」

時計を見ると、時刻は八時を過ぎていた。

「ホントだ！ 遅刻しちゃう！」

二人は鞆を持ち、バタバタと騒がしく家を出た。空は、朝の空気が心地よく、晴れている。

「じゃあね、お兄ちゃん！」

舞は、翼に手を振って、駆け足で学校に向かった。

「おう！ 転ぶなよー！！！」

妹の後ろ姿を見やり、翼自身も学校へと走った。

そんな微笑ましい兄妹のやりとりの側、九条家の塀の角に、一台の黒い車が停まっている。

いかにも高級車といった感じた。

運転席に座る、執事服の青年が、先程の兄妹の姿を見ていた。

「唯子お嬢様、あの二人が、和騎様が仰っていた九条翼と九条舞ですか？ 見たところ普通の子供ですが……」

執事が後ろの座席に座る唯子なる人物に振り向き、問いかけた。

「夜月、それを言ったら、私も、兄さんも子供です。あの人達は、私達同様、選ばれた存在です」

少し幼い顔立ちだが、透き通った声の少女が窓越しに風景を見ながら応えた。

「そうですね、失礼しました。……唯子お嬢様、お時間のようなのですか？」

夜月と呼ばれた執事は、腕時計を見た。

「そうね。……九条舞の護衛は大丈夫？」

「はい。彼女の通う学校の周辺に数名、付けています」

「そう。なら、出して頂戴」

「かしこまりました」

唯子が告げると、車が動きだし、九条家の前を走り去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4926h/>

仮面ライダーWING

2010年10月11日16時42分発行